

# Trends in Bronchopulmonary Dysplasia Among Extremely Preterm Infants in Japan, 2003–2016

中嶋, 敏紀

<https://hdl.handle.net/2324/6758959>

---

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (医学), 論文博士  
バージョン :  
権利関係 : (c)2020 Elsevier Inc. All rights reserved.

氏名： 中嶋 敏紀

論文名： Trends in Bronchopulmonary Dysplasia Among Extremely Preterm Infants in Japan, 2003-2016

(本邦の2003-2016年における超早産児慢性肺疾患の年次推移)

区分： 乙

## 論文内容の要旨

**【目的】** 本邦における超早産児の慢性肺疾患 (bronchopulmonary dysplasia, BPD) 発症頻度の年次推移と、リスク因子を明らかにする。

**【方法】** 2003-2016年に本邦のNeonatal Research Network参加施設で登録された在胎週数22-27週の児19,370例の背景・臨床データを解析した。全体の死亡率と修正36週におけるBPD罹患率および生存例におけるBPD発症リスク因子を調査した。

**【結果】** 対象19,370例のうち、2,244例 (11.6%) が修正36週までに死亡した。死亡率は2003年19.0% (99%信頼区間 (CI), 15.7-22.8%) から2016年8.0% (99%CI, 6.2-10.3%) に減少した。修正36週まで生存した17,126例において7,792例 (45.5%) がBPDを発症し、その発症率は2003年41.4% (99%CI, 36.5-46.4%) から2016年52.0% (99%CI, 48.2-55.9%) に増加した。生存例における多変量解析にて、酸素投与または侵襲的人工換気 $\geq$ 4週、出生体重 $<$ 750g、Small for gestational age、非侵襲的陽圧換気 $\geq$ 4週、絨毛膜羊膜炎、在胎週数 $<$ 26週、年間登録症例 $<$ 20例の施設、および治療を要した動脈管開存症は、BPD発症と正の関連を認めた。侵襲的人工換気期間は短縮されたが、BPD悪化に関連する因子の割合は研究期間中に概ね増加する傾向がみられた。

**【結語】** 超早産児の死亡率は減少したが、生存児におけるBPDの割合は増加した。侵襲的人工換気期間の減少にも関わらずBPDの割合が増加していることは、患者背景やその他の管理方法の変化がBPD発症に影響していることを示唆する。